

東日本大震災 復興・支援活動ニュースレター カトリック仙台司教区・カリタスペース

発行人：平賀徹夫
〒980-0014 仙台市青葉区本町 1-2-12
カトリック仙台司教区事務局
Tel.022-222-7371 Fax022-222-7378
1) 義援金振替口座:02260-9-2305
名義:カトリック仙台司教区本部事務局
2) 支援金振替口座:00170-5-95979
名義:カリタスジャパン

東日本大震災から丸9年、各地で、追悼と支援を感謝する集いが計画されました。しかし、思いもかけなかった新型コロナウイルスの発生によって、政府、被災各県の主催の行事が中止・縮小され、また、カリタスペースにおいても、ミサや祈りの集いなどを開くことができませんでした。しかし、関係者だけのミサであっても、ささやかな祈りの集いであっても、心のこもった祈りは、神様のもとに届いたのではないかと感じています。また、2月26日に亘理で行われた八木山オリーブの会の活動をご紹介します。東北大学の落語研究会の方々が年に一度、このような活動に参加してくださるのは、大変ありがたいことです。被災者の方もこの日ばかりは落語で大笑いをし、悲しみを少しでも忘れることができれば幸いです。

小さな「犠牲者追悼・復興祈願ミサ」

仙台教区サポートセンター 濱山 麻子

東日本大震災発生の日である3月11日に、仙台教区カテドラルで行うミサに仙台教区サポートセンターが主体となって関わるようになったのは、震災から6年目になる2017年からです。それまでも、3月11日にはカテドラルで規模を変えながらミサが行われていましたが、あまり周知されておらず、直前に開催が決まった年もあり、被災した教区のカテドラルなのだから、必ず毎年この日にはミサがあった方がよい、と信徒の方からの声が寄せられていました。スタッフも同じ思いを持っていたことから、「3.11 東日本大震災 犠牲者追悼・復興祈願ミサ」を2017年から行うようになりました。津波や原発事故で直接被災した方はもちろんのこと、大地震の揺れや、家族や友人と連絡が取れない不安、原発事故による見えない不安を感じた誰しもが、3月11日の、特に震災発生の14時46分には祈らずにいられないのではないのでしょうか。カテドラルのミサには、曜日に関わらず、毎年たくさんの方が集まってくださっていました。

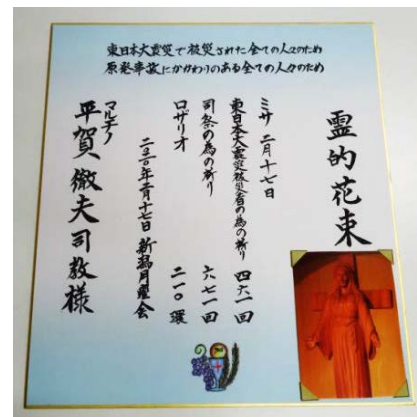
今年も3月11日に向けて、ミサの準備を進める中、新型コロナウイルスの感染が広がり、2月末に中止が決まりました。各所に中止のお知らせが済むと、ほっとしましたが同時にぼかんと気が抜けてしまいました。ミサの代わりになにか企画できないかと思っても、人を集めることができないのだから、どうしたものだろうと悩んだ挙句、せめてサポートセンタースタッフでその時間に一緒にお祈りをしましょう、ということになり、事務局長である小野寺洋一神父様にミサをたてていただけることになったのは3月10日のことでした。



震災当時の出来事を含めて、説教をした小野寺神父

3月11日、朝から東京、ローマに住むシスター、神父様からメッセージが届き、名古屋から訪ねて来てくださった方もいて、また、カトリック東京ボランティアセンターでは、動画配信で「祈りのつどい」を行うということで、この困難な状況の中で、たくさんの方が祈ってくださっていることに心強さを感じました。14時46分の鐘を合図に黙とうをささげ、その後、ミサが始まりました。今年は使わずじまいになるところだった「3.11 東日本大震災 犠牲者追悼・復興祈願ミサ」のミサ次第にそって進んでいきました。説教の中で神父様は、震災後数日経って、やっと再会したお母さんに「生きていた、良かった！」と抱きしめられ、「自分が生きていることをこんなに喜んでいる」と驚いた経験から、「自分はここにいて良いのだ、と感じることは神様から

のメッセージであり、私たちが大切にしながら、働きを通して伝えていこうとしていることそのもの」と話されました。



新潟地区の信徒の祈りのグループ「月曜会」が、震災後、毎年平賀徹夫司教様のところへ送ってくださる霊的花束

新潟教区では、3月4日から公開のミサが停止となっていますが、月曜会では、3月11日に間に合うようにと、2月例会でのミサと祈りを東日本大震災追悼・復興祈願ミサとして捧げられたとのことです。

震災から9年。思いもよらない状況で迎えた3月11日でしたが、それぞれの場所にしながら、たくさんの方々とともに祈ることができました。サポートセンターの活動は10年目に入ります。震災から10年となる来年以降、これまでの形にとらわれずに、求める声に答えていける支援の方法を考えているところです。思えば、この9年の間、私たちはたくさんのお会いに恵まれ、抱きしめられる経験をしてきました。私たちはそれに答えられているだろうか。今、閉塞感の中で立ち止まったままではなく、誰かを抱きしめる準備をしていきたい。小さな部屋でのミサにあずかりながら、そう感じました。



今年の3.11にあわせて作成した復興支援タオル
ご希望の方は、仙台教区サポートセンターまでお申込みください。

石巻ベースからのメッセージ

カリタス石巻ベースでは、3月11日に、オープンスペースで地域の皆さんと一緒にろうそくの明かりをともし、祈りの時間を持つことにしていました。しかし3月2日からオープンスペースを休止しているため、それも中止せざるを得ませんでした。毎年、3月11日の前はオープンスペースを利用する方々が落ち込む時期です。この時期にオープンスペースを開けられないので、利用者さんたちのことが気がかりでした。せめて道を行く人に、カリタスからのメッセージを伝えようということで、書道用の大きな紙にスタッフみんなで文字を書き、大通り沿いの窓に貼ることにしました。メッセージは「東日本大震災から9年 大切な人を忘れない 今 いのちをつないで生きよう」。津波で亡くなった家族や友人を思い、今生きているあなたの命を大切にしてください、という思いを込めました。震災発生の14時46分には、スタッフがオープンスペースで黙とうして祈りをささげました。

オープンスペースは3月いっぱい休止することにしています（その後は状況を見て判断）。一日も早く、ドアをいっばいに開けて皆さんをお迎えできるよう祈りながら、お便りの配布や電話での安否確認など、「今できること」を模索しています。



客席が全員マスクの落語会

オリーブの会 野田 和雄

2月26日（水）、オリーブの会は、カトリック亶理教会で落語会を催し、津波被災者と笑顔で交流しました。

落語会は、毎年2月に東北大落語研究会から「出前」をお願いしています。今回は、新型コロナウイルス拡大防止のため、入口でアルコール消毒とマスク配布を徹底しました。

全員がマスクをした姿で、「始めの祈り」を亶理教会委員長の長嶋治夫さんが唱えて始まりました。

まずは、学生落語家さんの紹介です。

「我捨臥舎ぼん（がしゃがしゃぼん）」「藍亭助務図（らんていじょぶず）」「諏訪楼ましろ（すわろうましろ）」。



写真左から、学生落語家の「我捨臥舎ぼん」さん、「藍亭助務図」さん、「諏訪楼ましろ」さん

亶理教会のスタッフは、祭壇をスクリーンでかくし、テーブルで高座を作り、緋もうせんを敷き、厚手の座ぶとんと芸名を書いためくり台を設けてくれました。亶理寄席の会場設営も4回目となれば慣れたものです。

CD ラジカセからおはやしが流れると、着物姿の話し手が高座に着いて落語が始まります。「転宅」「反対俤」など、古典落語が笑い声をさそいます。若さあふれる熱演が伝わり、マスクの下から笑い声が広がります。客席が全員マスク姿なので、話し手は少しやりにくそうです。それでも、笑いとの若さの協演に参加者の拍手には手ごたえを感じたようです。

落語が終わると、高座を片付け、テーブル、イスを並べて食卓の準備です。学生さんにも手伝ってもらったお陰で、いつもより早く整いました。被災者と学生さんが同じテーブルを囲み、「あんた上手だね！」「就職は？」「着物が似合うね！」と話が弾みます。

その頃、台所では、トンカツ40枚が揚げられ、山のように盛り上げられています。今日のメニューは、若者向けのカツカレー。学生さんは大盛りです。台所のマリア様の大活躍で、サラダや漬け物も並びます。

年配者が多いので、食べきれないと思った人は、若い人へカツを渡していくと、学生さんの食器には山盛りのカツが重なりました。おいしい笑顔が広がり、皆さん満足です。



みんなで一緒に食べるご飯は、より一層おいしく感じ、箸が進みます。



落語家さんの時とは雰囲気異なり、別人のような私服姿の学生さんたち。

食事が終わると、好例の歌の時間。仮設時代から使い続けている歌集には、亶理町旧館仮設と書いてあります。今でもこれを使っているのは「オリーブの会」くらいです。歌のリクエストは、思い出深い歌い慣れた曲ばかりです。選曲のたびに、ギターの鈴木隆さんと被災者の楽しいやりとりが笑顔を作ります。



4年前に閉鎖された仮設住宅の名前が書かれた歌集は、今も活躍中！

落語で笑い、食事ではほほえみ、楽しいおしゃべりと歌でまた笑う。そのたびに、笑顔が輝き、復興住宅住まいの孤独を忘れます。今年の花見は早くなりそうと今後の予定をお話して、お別れしました。

オリーブの会のスタッフミーティングでは、東京教区のミサ中止（2月25日発表）の影響と、3.11ミサの中止の可能性の話がありました。また、この日は、ちょうど灰の水曜日と重なっており、亶理教会に集まった県南4教会（大河原、亶理、白石、角田）と八木山の合同ミサに参加し、灰の式にも参加できました。



その後、新型コロナウイルス拡大防止のため、仙台教区でもミサ、集会の中止が決まり、3.11ミサの準備をしていた人々はとても残念がっていました。

私たちの傾聴ボランティアも見通しがたたず、手さぐり状態となりました。復興住宅の孤独に寄り添ってきた教会スタッフが、ミサ、集会中止の中で、孤立・寂しさを感じる立場になりました。こんな時だからこそ、祈り合い、支え合って歩む道を探していきたいと願っています。